日本災害情報学会. 新潟. 2014-10. （口演）

地域防災訓練における聴覚障害者への筆記と掲示の有効性と課題

北村弥生　国立障害者リハビリテーションセンター研究所

目的:地域の防災訓練において筆記と掲示を聴覚障害者に提供することで、
1)筆記の効果と課題を明らかにすること、
2)聴覚障害者の存在を地域に認知させるこ と、
3)聴覚障害者への支援方法を筆記者の活動から地域に知らせることを目的とする。

背景:災害時における聴覚障害者の困難は、情報不足と意思疎通かできる通常の人間関係を絶 たれることによる孤独であるといわれる。東 日本大震災の経験から、聴覚障害者か災害時に情報確保をする最も現実的な方法のひとつは筆談であり、避難所でのアナウンスの内容や大きな動きを画用紙にマジックで記入して 掲示することが提案された。この方法は、ろう者にも難聴者にも有効であるばかりでなく、 知的障害者、耳の遠い高齢者、記憶が苦手な 者、アナウンス時に席をはずしていた者にも 有効である。また、避難所の生活の記録にも なる利点がある。
しかし、誰かどのように筆記と掲示をすれば情報が確保できるのかは検討されていない。

対象と方法:

・一次避難所（Y 小学校）に 3 名の聴覚障害児者 B (30 歳代女性)、C (60 歳代男性)、D (小学 生女児)にモニターとして参加依頼。
・会場のアナウンスを画用紙に書き留め 掲示するための筆記者2名
・記録係1名（全体の進行 と支援状況の記録）
・手話通訳者は、説明的要素の多いプログラム(開会の挨拶、救急法の説明など示説、閉会の挨拶)を通訳。
・筆記には、コイルで綴った画用紙 各1冊(S115, マルマン, A3, B4)を準備。事前に、プログラムの項目を画用紙に記入。当日は、追加事項と実施時間を記入し、イーゼルに掲示。
・聴覚障害モニター、筆記者、手話通訳者、 記録者、自主防災組織長には、防災訓練終了後に、実施状況に関する面接調査を行った。

上:アナウンス内容を筆記・掲示
下:筆談、手話による会話（赤→はろう者2名）

スケジュール	事前記入（うち当日追記）	当日記入
開会式	2(2)	0
炊き出し訓練	1(0)	0
バケツリレー訓練	1(1)	0
水消火器訓練	1(1)	1
救急救護訓練	1(1)	0
災害時のトイレ	1(0)	0
仮設トイレ設置訓練	1(1)	0
閉会式	2(2)	5
合計	10(8)	6

表　X小での筆記記入枚数内訳　（枚）

結果

1. 筆記 枚数
事前記入数、当日追加数、当日作成数は10,8,6。

2.筆記の効果
(1)基本的な情報伝達が確保され、聴覚障害モニターが訓練に積極的に参加できた
(2)筆記は地域住民にも認知され、進行全体の補助的な記録として住民にも活用された

3.筆記の課題
(1)記載内容の選定:「状況をまとめて必要なことを選別して記入すればよいことに後で気づいた」「画用紙に記入して示すと、ろう者からは手話で内容の確認がしばしばなされた」
(2)平行して実施されるプログラムがあった場合には筆記すべき音声の選択が困難であった
(3)掲示は旨くできなかった:掲示場所の選定、画用紙を切り取る作業に慣れていなかった、個人に見せることに集中しすぎて全体へ掲示する意識を持ちにくかった。

4.手話通訳の課題
(1)手話で通訳する内容の選別 :筆記・動作との補完
(2)手話通訳者の数と配置:モニター3名、手話通訳者2名で、3名が地域住民とは慣れて行動を共にした。

5. バンダナ:4名中3名で文字は読めなかった。知っている人にしかわからない。

考察:
・避難所では、画用紙への筆記により基本的な情報提供は確保される。しかし、防災訓練での情報保障は個別が有効と考えられた。

・防災訓練での筆記と掲示は、聴覚障害者への支援方法を効果的に周知した。いかに継続するかは課題である。

・筆記は容易とはいえず、「事前に記入して準備」「要約筆記者に研修」「地域の防災訓練で役割分担」「筆記の掲示場所を決める」 などが必要と考えられた。

・手話による情報伝達やろう者同士の手話による会話を可能にする場の調整 も必要と考えられた。